



キャンパス点描

— 第2体育館・チェリー —



第15号

2021年
6月25日発行

日本大学国文学会

同窓会誌



第2体育館の取り壊しに先立って1階の学食「チェリー」が閉店。写真は昨年12月の様子だが、この建物に懐かしさを覚える卒業生は多いだろう。体育館とはいえ、地階にも学食「福松食堂」があり、長年利用されてきた。かつて2階の階段脇に小さな売店が、地階の正門側の端には弁当屋があった時代も……。



OB・OGだより

学級日誌

河井 謙治

国文学科を卒業後、都内中高一貫校で定年まで勤め、縁あって三年前から大東文化大学で講義を担当しております。

講義は教職に関するもので、たとえば令和二年度後期の講義では、改訂された学習指導要領、デジタル教科書の問題点など、紅野謙介先生の『国語教育 混乱する改革』を援用しながら現場での実践報告を交え進めてまいりました。余談としてかつて勤めていた時の学級日誌の工夫を紹介したところ、学生の反応が強かったので紹介いたします。

学級日誌は日直が記す普通の日誌ですが、担任は押印の他若干コメントを記します。プロ野球、公開された映画、新聞のコラム、アイドルグループの話など新聞の切り抜き、映画のちらしなど添付しながら余白に小字で書いていきます。すると日直だけでなくそれ以外の生徒からの参入もあり、時には

余白に書き切れず、別ページを使い、或いは紙を貼り付け書き加えられ、小さな論争が日誌上で展開されます。

もはや日誌は日々の記録を超え意見交換の場あるいは今で言う「つぶやき」「ぼやき」の場となり、狭いスペースですが生徒との交流の場となりました。ささやかな事柄ですが、廊下ですれ違った時に日誌の話題に触れると生徒との距離感がなくなり、授業、部活などでは見せない生徒の素顔に接することができます。赤ペンでなく青ペンなどを用い垣根なく生徒と接することが担任の密かな楽しみとなりました。

〔昭和50年国文学科卒業〕

教員一年目を終えて

加藤 志おり

大学を卒業したばかりの私が急に三十五人の中学一年生の担任になり、教員一年目は毎日が嵐のように過ぎ去っていきました。教職に抱いていた理想は打ち碎かれ、上手くいかないことの連続でした。クラスをもつたらこうしたい、国語の授業ではこんなことをやりたい、などと考えていたことも実

行できず、授業は指導書通りに進めることで精一杯でした。オリジナリティを発揮する余裕などありません。そんな理想と現実のギャップに苦しみながらも、なんとか年度末まで辿り着くことができました。

最近、クラスの中で自分勝手な行動をとり、周りが見えていない生徒に対し、「本気」で叱れるようになりました。初めは生徒に遠慮し、言いたいことも言えず、いつまでもたつても生徒との信頼関係が築けないもどかしさがありました。しかし、ある日、他の生徒を傷つける行動をとった生徒に本気で腹を立て、ありのままの感情をぶつけたところ、私の思いがしっかりと伝わったようでした。おそらく、私が自分をさらけ出し、生徒と正面から向き合えたからでしょう。このことを通して、本気で生徒のことを思うのならば、時に嫌われることを覚悟してでも、自分の思いをまっすぐに伝えることが大切なのだと学びました。

学級のこと、授業のことなど大変なことはたくさんありますが、やはり生徒と一緒に過ごす時間は心から楽しいと思えます。これからも、教員に憧れていたあの時の気持ちを忘れずに、精進していきます。

〔令和2年国文学科卒業〕

修正テープと水性マーカー

小川 志門

二〇二〇年四月、文具や画材を扱う文房具店に就職した。

初出社に臨んで、「大学生」という肩書きをトンボのモノエアーで白塗りして、その上に三菱のボス力で「社会人」と書いた。

しかし、肩書きというのは、書いてすぐには定着しないものだ。ボス力に速乾性はない。しかも、修正テープで白塗りされたかつての肩書きは、消えてなくなるわけではない。白いテープで覆い隠しているだけだ。だから、それらが気まぐれに顔を出すこともある。そのせいで、新社会人は「いつまで学生気分であるつもりだ!」とかいうお言葉を、上司から頂戴するはめになる。

上司の皆様には、どうかご理解いただきたい。新社会人は社会人への過渡期にある。書いた肩書きもすぐには乾かず、頼りない。

ただ、ボス力で書いた字は、乾けば水に強く、定着した肩書きは、簡単には消えない。だからこそ、ボス力で何を書くかは、慎重に考えなければいけないともいえる。

幸運にも私は、不安になるほどに自由だ。きつと、何にでもなれる。厄介な大人に出

会うたび、そんな大人になってしまいう可能性に修正テープを引いてきた。その上には、どんな大人になりたいかを水性マーカーで書いてきた。

これからも、それは変わらない。思うままに人生を形作っていく。その傍らで、修正テープは映写機のように回転されるのを、水性マーカーは現像液のように攪拌されるのを、待っている。

〔令和2年国文学科卒業〕

寄り道

辻 菜摘

昨年九月、感染症流行が続くなか、大学を卒業した。同時に神奈川県の高校の臨時任用教員に採用され、その間に教員採用試験に合格。本年四月から同県の専任の高校教員となった。振り返ってみれば、教師になるまでの道程は平坦なものではなかった。

私は中学生の時、いじめられていた友人を手助けできなかったことがきっかけで教師になろうと決めた。しかし、家庭の事情で高校卒業後すぐに大学へ進学することは叶わなかった。そのため一度、医療事務員

として働いたのち、本校の通信教育部文理学部に入學した。最初の一年目は履修の方法も学習の要領もわからず、たったの十三単位しか履修できなかった。さすがにこのままではまずいと思い、二年目以降からはスクーリングに積極的に参加し、レポートも毎回欠かさず提出するよう心掛けた。そのおかげで、独学では気付けなかった発見をしたり、多様な経歴を持つ学友たちとの交流を通して、良い刺激を受けることができた。また、レポートを多く書いたことで、文章力も身についたように思う。最後の関門、卒論の執筆は、指導を受けつつ終始悩み続けはしたが、様々な文献を読破・活用しながら、何とか書き上げることができた。

こうした私の経験を、前任校の離任式で生徒たちに話したところ、「先生のように諦めずに頑張りたい」などの声をもらった。この道に進んで良かったんだ、とやっつこの時に思うことができた。寄り道をしたこととは無駄ではなかったのだ。

〔令和2年文学専攻（国文学）卒業〕



わたしの仕事

地方自治体職員（桶川市役所）



大学2年の時、友人たちは教員になるためのコースを受講し出した。皆が将来に向けて動き始めた頃、私はまだ何の目標も持たない学生だった。就職に漠然とした焦りを感じた私が考えたのは、自分は一体何をやりたくないのか、ということであった。今思えばなんとも消極的だったが、ともかくそんなことから私の就職活動は始まった。

もちろん、その時点では公務員になることなど考えてもいなかった。

その後、2年生も終わりの頃、学内で行われた公務員講座の説明会になんとなく出席したことで、私の人生は大きく変わった。その講座を通して出会った一人の恩師が、公務員の道へと導いてくださったのだ。試験以外のことでいろいろとお世話になり、この恩師とは今でもお付き合いが続いている。こうして、目標が定まってからは公務員試験の勉強を必死に進め、授業と卒業論文にも取り組みながら、どうにか苦境を乗り越え、地方公務員となった。

さて、ひとくちに公務員の仕事といってもその内容は多岐にわたる。身近なものは、ごみの処理や水道などのインフラ整備、子育て支援、結婚相談など、実に様々である。そんな私の公務員人生初の配属先は土木工事を行う部署であった。その部署から国文学科出身の私に、最初に手渡されたのが「関数電卓」と呼ばれる計算機だった。これまで数学に関することなど極力避けて通ってきたのだから、見たことも聞いたこともないそんな電卓の使い方などわかるはずもない。まさか数学を必要とする部署にまわされるとは想像もしていなかったので、不慣

れなうちは本当に大変だった。やがて仕事を覚えていくにつれて、面白さも実感できるようになっていった。土木工事というのは現場での修復作業が主で、その成果ははつきりと目に見える形で示されることが多い。それだけに、仕事としての達成感は何度も味わうことができた。結局、この部署には通常2〜3年で異動のところ、6年もお世話になり、その間に国家資格の土木施工管理技士試験にも合格した。

現在は広報活動に従事し、カメラ片手にフォトショップとイラストレーターを使って市の情報発信を担う仕事をしている。異動という名の転職なのではないかと感じるほど、仕事内容も労働環境も大きく変わった。これほど多種多様な仕事のできる場所はそうそうないだろう。そんなところも気に入っている。好き嫌いをいつている場合ではないともいえそうだが、興味を持てば何でもできる。そこが公務員の魅力だと思う。

秋山 太一郎 平成元年6月25日生まれ。
同24年3月国文学科卒業。卒論は古事記の
スサノオノミコトについて執筆。趣味は
バイク、キャンプ、読書、ゲーム、野球、
風景写真、スノーボードなど。興味を持つ
となんでも始めてしまうため、これ以上趣
味を増やさないように気をつけている。

談話室

忘れえぬ出来事

鈴木 晴彦

穏やかで、何も起こらない平凡な日々。これ程ありがたく、幸せなことがあろうか。大病で病床に伏せたり、また大災害に見舞われた時など、平凡な日々へのありがたさが痛感する。いまだコロナ禍の真っ最中。ワクチン接種の早期皆実施を切望するところだが、在職中、最も平凡な日々を揺るがせたのは、やはり東日本大震災であった。

3月11日、私は8階建マンション5階の自室にいた。横揺れが増幅したのであろう。書棚から大量の書籍が落下。足の踏み場も



—炎上するコスモ石油千葉製油所—

なかった。幸いに怪我はなかった。逃げ道を確保しようとして、すぐさま玄関ドアへ向かい、解錠した。そして、外をうかがうと、赤々と燃えさかり、黒々と黒煙を

あげる異様な光景が目飛びこんできた。不謹慎ながら、とっさにカメラを持出し、シャッターを押していた。夕刻のニュース報道で、ヘリからの空撮がTVに映し出され、地元製油所のタンク火災であることを知った。一方、都内での帰宅難民の様子や震源地東北地方の惨状も画面から流れ、未曾有の大災害であることを思い知った。

翌日、学科からゼミ所属学生へ安否確認依頼の連絡が入った。当時、所属していたゼミ学生は、卒業をひかえた4年生11名と、3年生12名の総勢23名への安否確認であった。すぐさま学生へ連絡をとり、ほぼ一両日中に安否確認がとれた。しかし、3日、4日を経過しても、どうしても連絡をとることのできない学生が1名いた。

携帯電話へいくらかけてもつながらない。数限りないメールを送信するも、まったく返信がない。不安と焦りのつのる状況の中、5日目をむかえて、本人から連絡が入った。聞けば、実家の青森県八戸に帰省中、震災に遭ったとのこと。避難所にいたことから、電源確保ができず、通信を断たれたとのことであった。いささか肝を冷やした忘れえぬ出来事であった。

とところで、震災の翌年11月、宮城県石巻

市雄勝へ視察に出かけた。雄勝は国内靛生産の9割以上を占める「靛の町」であった。しかし、震災により壊滅状態に陥り、この視察で自然災害の猛威を目のあたりにした。

視察後、授業で伝統工芸の重要性と震災による惨状を学生へ伝えたところ、授業後一人の学生が話しかけてきた。聞けば、夏期休暇中、雄勝で復興支援に汗をかいていたという。それを聞き、物見遊山的な我が視察を恥じ入るとともに、前向きでボランティア精神に長けた学生が身近にいることに喜びを感じた。これも、忘れえぬ出来事であった。

ちなみに、最後のゼミ指導学生の中に、いまだ復興途上にある現雄勝靛をテーマにした学生がいた。福島県出身のこの学生は、自身も避難所生活を余儀なくされたという。コロナ禍の中で、雄勝への現地取材を決行し、雄勝の現状を卒論に書きあげ、無事に今年3月に果立っていった。

『元国文学科教員』



—震災直後の雄勝靛伝統産業会館—

読

書

案

内



書物で感じる 江戸時代の味覚

大西 真央

思いもよらぬウィルスの脅威に、自宅で過ごす時間が長くなり、料理に割く時間が増えるようになった。料理のレパートリーは、ネット上の情報から手軽に増やすこともできるが、凝った料理をした時には料理本が欠かせない。

江戸時代にも、いわゆる料理本は存在していた。吉井始子編『翻刻江戸時代料理本集成』（全十巻・別巻一、臨川書店）には、豆腐料理を集めた『豆腐百珍』（天明二年刊）や、さつまいも料理をまとめた『甘藷百珍』（寛政元年刊）など、江戸時代に刊行された五十種類もの料理本の翻刻が収録されている。

松下幸子・榎木伊太郎編『再現江戸時代料理』（小学館）では、江戸時代の料理本などをもとに、様々な料理の再現が試みられている。料理ごとに出典となる史料部分が引用されているだけでなく、調理過程や完成品の写真も豊富で、当時のレシピの書き方と料理の再現イメージが同時に捉えられる魅力的な一冊である。材料や調理方法も詳細に記してあるもので、自分で再現に挑戦することも可能だ。個人的には、夏に向けて山の芋や豆腐で鰻の蒲焼を模した「せたやき芋」や「鰻鱺様」などを作ってみた。

福田浩編著『江戸料理をつくる』（教育社）でも、多数の江戸時代料理が再現されており、完成品の写真はもちろんのこと、各料理の大まかな作り方や当時の食に関するコラムも綴られている。かぼちゃ餡を包んだ和風のパンブキンパイ「けさいな餅」や、

千利休も茶会で使用したという和風クレープ「麩の焼」など、菓子の再現もされていて、この一冊で当時の味覚が幅広く堪能できる。

こうした江戸時代料理の再現は、漫画にもなっている。漫画家の花福こざる氏は、『豆腐百珍』掲載の百品目すべての再現に挑戦しており、その過程を漫画『豆腐百珍百番勝負』（イースト・プレス）で軽快に描いている。味噌・酒・黒砂糖・粉山椒を混ぜた薬味を乗せてグリルで焼いた「木の芽田菜」は「おいしい」と評する傍ら、豆腐をすって人参を巻いて蒸した「鶏卵様」は「微妙」とするなど、再現した料理の率直な感想が記されていて面白い。ちなみに、この「鶏卵様」もボン酢醤油をかければ美味しくいただけるそう。このように、作中ではより美味しく食べるための現代風アレンジなども紹介されている。手に入りやすい素材や調理器具は、今あるもので代用するなど、調理のイメージも再現のチャレンジもしやすくなっていて、江戸時代の料理に興味はあるが、堅苦しいのは苦手という人にもオススメの作品だ。

美味しい食事というのは、豊かな生活の基盤であり、心を満たしてくれるものだ。それは、今も昔も変わらないはずである。こうした事態だからこそ、「食」という観点から過去に思いを馳せつつ、食事を楽しんでみてはいかがだろうか。

「国文学科副手」

1966年(昭和41年)

- 1月 1日 日本からの海外観光渡航の回数制限が撤廃
 1月17日 水爆を搭載した米B-52爆撃機がスペイン沖で墜落
 2月 4日 全日空が羽田沖で墜落。133人全員が犠牲
 2月 7日 ソ連の無人探査機「ルナ9号」が月面に着陸
 3月25日 『語文』第23輯刊行
 4月 1日 金子義夫氏が国文学科教授に、山田肇氏が同専任講師に就任。
 5月16日 中国で文化大革命が開始
 5月23日 ロケット打ち上げ場が種子島に決定
 6月20日 『語文』第24輯刊行
 6月25日 建国記念の日・敬老の日・体育の日が制定
 6月26日 日本大学国文学会総会開催
 6月29日 ビートルズ来日
 7月 4日 新東京国際空港が成田市三里塚に決定
 7月11日 広島の実験ドームの永久保存が決議
 8月18日 袴田事件で袴田巖が逮捕され47年以上拘束
 11月 1日 国立劇場が開場
 12月25日 『語文』第25輯刊行、『国学』・『語文』通巻目次・索引を付した。
 12月 9日 建国記念の日が2月11日と決定
 12月20日 東京地裁が結婚退職制を違憲と判決
 12月27日 衆議院「黒い霧」解散



ビートルズ来日の様子



【国内外の動き】世界情勢は宇宙、核兵器開発が目立った。国内は国際化の基礎が固められつつあった。この年から日本からの海外観光渡航の回数制限が撤廃された。二月の全日空機羽田沖墜落事故など航空機事故が多発した年でもあった。四月には国内でのメートル法が完全に施行され尺貫法の公的な使用が禁止された。祝日が追加されることになったが、建国記念の日を二月十一日とすることについては文化人による反対声明が発せられた。政界は「黒い霧」疑惑が度重なった年となった。国勢面では日本の総人口が一億人を突破したが、この年は丙午（ひのえうま）にあたり出生数は百三十六万人と大きく落ち込んだ。文化面では六月にビートルズが来日し日本武道館で公演を行った。テレビの普及がいつそう進んだ年で、広告代理店「電通」ではテレビ広告費が新聞広告費を上回った。そして五月にテレビ番組「笑点」が放送開始、十月に『週刊プレイボーイ』が創刊、十一月に国立劇場が開場、また「カローラ」（乗用車）、「サッポロ」番・「チャルメラ」（即席麺）、「ポッキー」（ゲーム用菓子）、「柿ピー」（つまみ）、「ラーマ」（マーガリン）、「ママルモン」（洗剤）などが続々と発売された。文壇では青木賢豪、井上謙、北野克、工藤進、森淳司らによる研究発表の後、吉田精一氏による「市民社会と文学」と題する講演が行われた。



久米依子（近現代文学専攻）研究室

研究室訪問 一問一答

- ① 特技は何ですか。
ここぞという日に、雨が降ります。
- ② 一番お気に入りの文学館はどこですか。
日本近代文学館。「芥川コーヒー」が美味しいですよ！
- ③ よく行くお店を教えてください。
下高井戸なら「ウララカ」「ノリエット」。
- ④ 毎年のノルマは何ですか。
庭の梅の実で梅酒造り。
- ⑤ 今一番行きたいところはどこですか。
ゼミの飲み会や文学散歩。早くコロナ禍が収まりますように。

掲 示 板

国文学科短信

荻野綱男（日本語学）、梶川信行（上代文学）、竹下義人（近世文学）の教員3名が退職し、この4月からはそれぞれ特任教授の資格で引き続き授業を担当している。

ウイルス感染症の流行は収束する気配すらなく、今年度も大学は静かなスタートを切った。授業形態が遠隔式（一部対面式）のため、学内は相変わらず閑散としている。

ここで3月・4月の学科行事を振り返ってみよう。

令和2年度の国文学科の学位記伝達式（3月25日）は、オーバルホールで催された。内容も時間も簡略化され、もとより卒業生全員が出席できたわけではないが、束の間の再会の場、別れの場としての役割は果たせたように思う。また、4月の新入生向けの諸行事もウイルス対策を講じながら注意深くおこなわれた。

以下は蛇足だが、7月末完了を目途に医療従事者から始められたワクチン接種は、ようやく5月に入って高齢者に順番がまわったばかり。しかもまだ予約段階。当面、流行の抑制に効果が期待できるのはワクチンだけなのだ。人々の自粛生活にも限度がある。一刻も早く接種が完了することを願う。

国文学会大会案内

昨年、中止となった日本大学国文学会の大会が、今年度は研究発表を中心にすえ、総会も含めてすべてオンライン方式で開催される運びとなりました。

開催日時は7月10日（土）、午後1時半開始。以下に当日の予定の抜粋を記しますが、詳細は国文学科サイトの「お知らせ」の記事をご参照ください。

12:15 評議員会（評議員のみ）

13:30 開会の辞

13:40 研究発表

①鈴木雅裕（通信教育部助教）

②ラヴェル・イザベル（文理学部助教）

15:00 休憩

15:10 研究発表

③李婷（文理学部助教）

④袴田光康（文理学部教授）

16:30 総会

17:10 閉会の辞

上記の大会に参加するためには、事前に参加申込手続きが必要です（指定フォームに必要事項を入力して送信）。締切は6月26日（土）。手続きの詳細は事務局からの案内もしくは学科サイトでご確認ください。皆様の参加をお待ちしております。

同窓会員募集のご案内（郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会）

国文学会では国文学科の卒業生（大学院・通信教育部を含む）を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円（2年分）から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第15号

2021年
6月25日発行

日本大学文理学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区桜上水3-25-40

編集後記

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。
電子メールは国文学科サイト内に設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。

◆新型コロナウイルスの流行は第4波の渦中にある。東京の感染者数は一時より減ってはいるものの、気は抜けない。ウイルスも次々と変異株に置き換わっているという。ワクチン接種は遅れ気味で、安心材料は一つない。そんな状況下、今号もどうにか発行できた。「ゼミだより」は休載とした。◆原稿は通常、編集サイドで執筆者を選び、依頼してきているのだが、近年は自主的投稿が相次ぎ、大いに助けられている。◆巻頭のカフエテリア「チエリ」の撮影は、助手の荒川真一氏による。（義）

国文通信編集委員会
紅野謙介・鈴木功真・竹下義人